



## 創世ホール文化講演会 南伸宏（南伸坊）講演会

日時：令和4年3月13日(日)

午後2時30分開演

会場：3階 多目的ホール 入場：無料

講師：南伸宏/南伸坊

(みなみのぶひろ/みなみしんぼう)

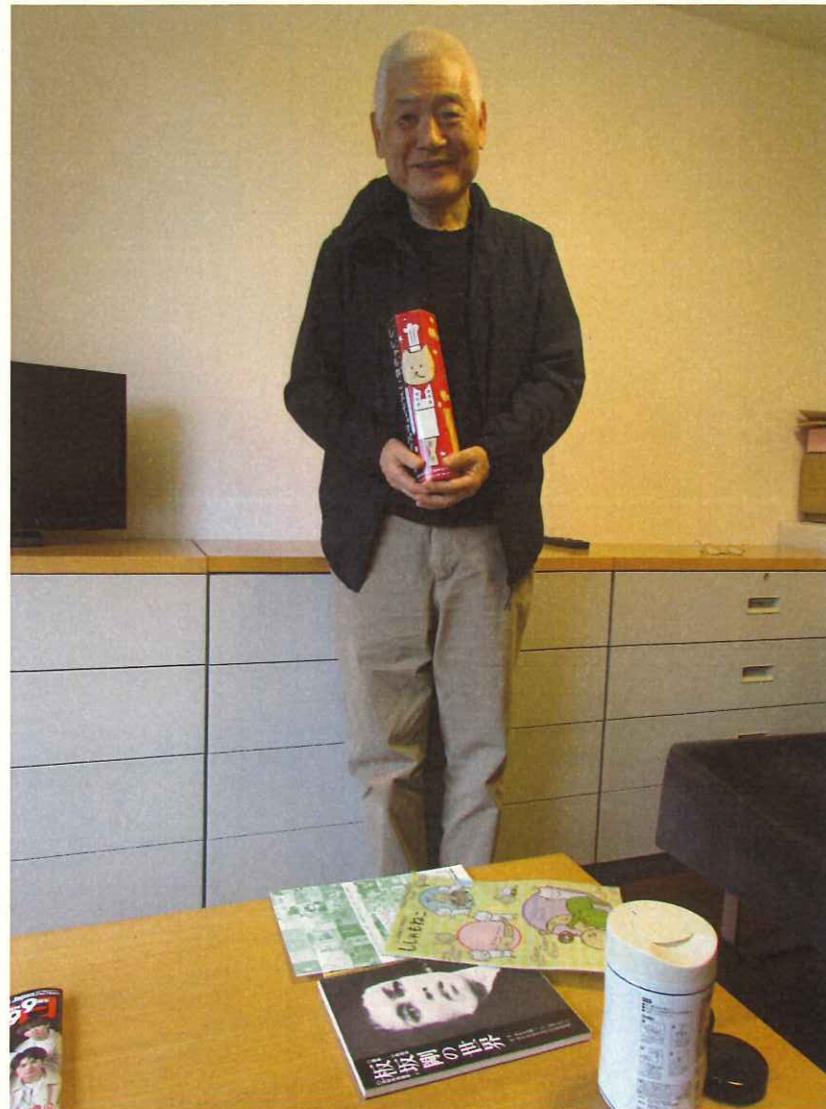
(イラストレーター・装丁デザイナー

・エッセイスト)

演題：「南伸坊が語る私のイラストレーション史」

主催：北島町立図書館(☎088-698-1100)

■漫画・ロック・特撮・SF・幻想文学…現代に至るまでのサブカルチャーについて、当館は過去に様々なテーマで講演会を開催してきた。■今回はイラストレーター、装丁デザイナー、エッセイストとして多方面で活躍されている南伸宏(南伸坊)氏をお招きし、戦後日本のイラストレーション史を俯瞰した講演をしていただく。■南氏が深く敬愛する和田誠氏、師匠の赤瀬川原平氏、長年編集に携わり無二の個性を持つ作家を多く輩出した『月刊漫画ガロ』など、60年代～80年代の活気と熱気の渦巻く文化・芸術シーンのなかで綺羅星の如く輝く表現者たちの人と作品について語っていただく。■講師先生のご意向により、創世ホール元館長・小西昌幸氏が聞き役となり、対話形式で行います。皆様、多数ご参集ください。

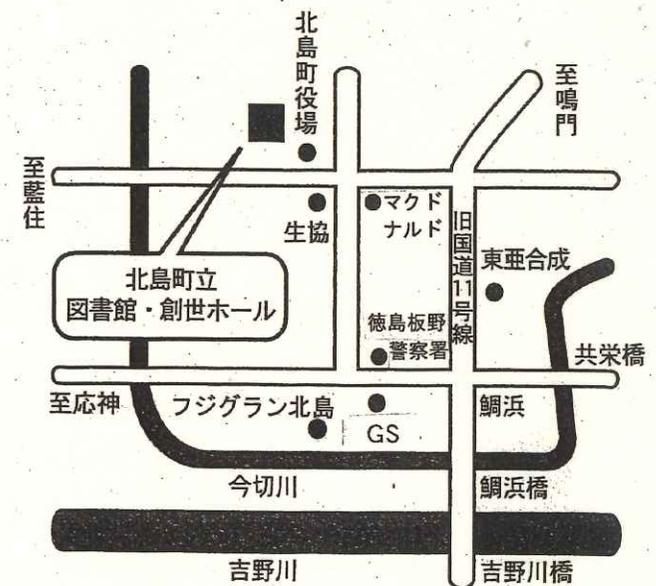


### ※創世ホールに来場される方へ※

▼入場される方には、マスクの着用と手指のアルコール消毒をお願いいたします。

▼観客同士の距離を一定の間に保つため、3階多目的ホールの座席数を減らしております。(前後左右を1席空けてお座りいただくようにしております)

■なお、今後の感染症拡大状況に応じて、対応を変更することがあります。ご迷惑をおかけしまして恐れ入りますが、ご協力くださいますようお願い申し上げます。



# 文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

## 牧弘子さん(小松島出身映画プロデューサー)の思い出②

●小西昌幸(元北島町立図書館・創世ホール館長)

■2021年2月号の「文化ジャーナル」で、「牧弘子さん(小松島出身映画プロデューサー)の思い出」という追悼の文章を書きました。その反響の書簡の紹介とともに、その後の出来事などを綴ってみたいと思います。まず、映画監督の藤原道夫さんからの書簡2通をご紹介します。

### 【映画監督・藤原道夫さんからの書簡1(2021年2月26日着)】

小西様

2月22日、牧弘子さんへの追悼文を読ませていただき、本来ならすぐに電話でもするべきでしたが、小西さんの文章に強く感じるものがあり、できませんでした。

それにしても多くの紙面を使い、牧弘子さんの仕事への姿勢を書きいただき、感謝の気持ちとともに私たちが大事なものを失ってしまったことを実感しました。

短いものではありましたが、集中的な小西さんと牧さんの共同作業、その中で小西さんが牧さんの深いところに秘めていた、映像への信頼と思いをしっかりと受け止めていたのだと再認識させられた文章でした。

66歳は若すぎでした。特に若い感性を持っていた牧さんの場合は、強くそのことを思わせました。

私は送っていただいた記事を早速、牧の仕事仲間に送りました。

喪失を悲しんでいる者たちも、この文章で少しは新しい光を感じてくれるのではないかと期待しています。

小西さんにお願ひがあります。

以下の方に是非この記事を読んでいただきたいのです。

- ①Aさん(実家の実兄)小松島市
- ②Bさん(姉)小松島市
- ③Cさん(叔母)徳島市
- ④Dさん(親友)徳島市
- ⑤Eさん(先輩)小松島市

お手数かけてすみません。

どうぞ宜しくお願い致します。

牧さんが手がけていた「エルシステム」完成に向けて頑張ります。

また、お力添えいただくことと思います。

失礼いたします。

令和3年2月24日

藤原道夫拜

### 【映画監督・藤原道夫さんからの書簡2(2021年6月21日着)】

小西昌幸様

関東も本格的な梅雨に入りました。

コロナだけでもうっとうしいのに、雨もまた動きを悪くします。

とはいえ米をはじめとする農業には大切な梅雨です。

文句など言わず、過ごさなくてははいけないと心するものです。

ご無沙汰しておりました。

小西さんから感動的な文化ジャーナルをいただいて、4か月ほど、牧弘子さんが去って6月21日で丸半年となりました。

月日の経つ早さには、圧されるものを感じていますが亡くした悲しみは全く癒えません。

そんなところへ、今日は残念な報告をしなくてはならず、手紙を書かせていただいています。

牧さんが心血を注いでいた映画「エルシステム」が完成させることができなくなってしまいました。

グアテマラまで撮影に行き、3年という時間をかけたのに残念です。

牧さんは自分が亡くなることなど恐らく全く考えていませんでしたが、入院や手術療養などで予定よりも完成が遅れていくことを気にし、心配していました。

それを受け、小西さんが書いて下さったように、私がやって完成させ、牧の最後の仕事として世に出そうとしたのですが、意外な結果になってしまった訳です。

私は長らくこちらの事情もあり、休止状態になっていたが、それは牧さんが亡くなってしまったこと、それ以前に闘病で動けなくなったこと、などを説明し、すべて私が後を引き継ぎ完成させることを約束するために映画製作に全面協力してきた「エルシステムジャパン」の代表者と会いました。

その時、先方が「牧さんからは闘病中で延びていてすみません」と連絡をいただいていたのですが、こちらはお返事できる状態ではなくなってしまい、何て牧さんにあやまろうかと思っていたところですが、と言います。

牧さんの映画は女性ソプラノ歌手が始動する「ホワイトハンドコーラス」のグループと、エルシステムジャパンが直接指導する「クラシックオーケストラグループ」の活動をほぼ50パーセントずつの比重で追いかけてきていました。

このグループが、コロナによって引き起こされた運営をめぐる考え方の相違がとめどなく拡大し、一緒に活動をしない、わかり易く言えば運動体が分裂してしまったのです。

貧しかったり、不幸だったりする子どもたちを音楽の力で勇気づけ、平和を実践できる志を育てようという「エルシステム」の理想はひとまずついでてしまいました。

私もいろいろ考えました。しかし、映画は完成できない、完成させても、牧さんが考えていた足元にもそのレベルは及ばない。牧さんだったら、最終的に止めたと思います。

やるからには牧さんの名前を傷つけるようなものにはしない。むしろ輝くものにしようと勢い込んだ私も、梯を外された感じです。

小西さんが楽しみにして下さり、皆にも「文化ジャーナル」で伝えてくれたのに、本当に残念です。

もし、小西さんの周りで映画のことを気にかけて下さる方がいらっしやったら、小西さんの方から伝えていただけると有難いと思います。深く知りたいという方には勿論、つないでいただければ私から説明させていただきます。

順調に進んでいけば、今ごろは丁度かたちになっていた頃だと思います。

コロナがなかったらとは思いますが、何よりも牧さんが元気でいたならと思います。

牧さんにこの映画のことは、将来私が叱られるのではないのでしょうか。

残念な報告お許しください。

小西さんの応援にはいつも感謝しています。

なにはともあれ、お元気で過ごされて下さい。

6月19日

藤原道夫拜

■藤原道夫監督からいねいな直筆のお手紙をいただいた。1通目の書簡は小西の自宅(北島町鯛浜)にお送りいただいたのだが、2通目の書簡は北島町立図書館気付だった。実は、北島町立図書館・創世ホールは昨年(2021年)4月から耐震改修工事(メインは3階多目的ホールの吊り天井構造の改修)のため、年末(同年12月)まで3階ホールやギャラリー部分が休館になっていた。そのためその期間は(催しがないので)、「創世ホール通信/文化ジャーナル」も休刊となり、私は長期にわたって施設の事務室に足を運ぶことがなかった。そのため、2通目の書簡を読んだのはつい最近のことだった。藤原監督にはすぐお電話をかけて、上のような事情を話し、謝罪したのだった。

■ドキュメンタリー映画の場合、撮影される側の意向が強く反映されることはやむを得ない。何らかの運動体や組織の場合、路線対立のようなものがあると、うまくゆかないことがある。今回はエルシステムという、グアテマラでの芸術文化による貧困からの救済運動が内部で問題があったことが報告されている。大変残念なことであるが、それは牧さんや藤原さんのせいではないことなのだ。映画のフィルム代や渡航費用もたくさんかかっていたはずなので、本当にお気の毒だと心の底から思う。藤原監督が謝罪するようなことではないと思う。

■シロウト判断だが、コロナ禍で演奏発表の場が激減し(あるいは殆ど消滅し)、そのため「エルシステム」内部で、運動路線の対立のようなものが噴出したということなのだろう。以前はおそらく、演奏会場で出演者の少年少女たちの笑顔や、聴衆の笑顔や感動の声があれば、皆手応えを感じて、運動路線をめぐる分裂など起こりようもなかったのではないかと。政治運動と文化芸術運動のどちらに重きを置いたか、ということも対立の根幹にあるのではないかと勝手な想像を巡らせている。とにかく、藤原さんたちが多額の借金を背負って困ることなどがないように、そしていつの日か問題が解決しますようにと、祈らざるを得ない。

■藤原さんの「書簡1」を受け取って、私はそこでご指示のあった牧弘子さん所縁(ゆかり)の方々に「創世ホール通信/文化ジャーナル」2021年2月号(「牧弘子さんの思い出」掲載号)をお送りした。次々反響があり、お礼の電話などを頂戴した。

■そして3月初めのある日、小松島のM蒲鉾店というお店から冷蔵パックの宅配便が届いた。中には、ちくわや天ぷらやフィッシュカツがたくさん入っていて驚いた。牧弘子さんのご実家は、かまぼこ製造の老舗の会社なのだった。すぐにお礼の電話をかけた。電話口に出られたお姉さん(お兄さんの嫁さん)とお話ししていて、私の妻の実家と、牧さんのご実家とが、共通の親せきをもっていることも分かった(すごく遠い親戚関係であることが分かった)。その後、春になって5月頃だったろうか、私は自宅ととれたサクランボを手土産に、小松島のM蒲鉾店をはじめ表敬訪問した。そしてサクランボをお届けし、お仏壇に手を合わせて、牧弘子さんのご冥福を祈ることができたのだった。それからは、スーパーの食品売り場でM蒲鉾店のちくわなどを見るたびに、私は牧弘子さんを思い出している。(了)

【お知らせ】■3月13日の南伸宏さん講演会は、南さんのご要望により、小西との対話形式で行ないます(過去の事例でいうと、山田太一さんの講演会や地引雄一さんの講演会の時のようなパターン)。3月初め頃から、関連資料の展示などを図書館カウンター前で行なう予定です。南さん関係の資料(著作や南さんが実質編集長を務めた70年代の『月刊漫画ガロ』や表紙を担当された『ヤングコミック』など)のほか、南さんが強い影響を受けた和田誠さんの資料(初期の『話の特集』など)も展示する予定です。(小西昌幸)